

南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

第9号 2016年11月1日

目 次

過去は前方に、将来は背後に一常設展示室への招き	市瀬 英昭	2
聖園女学院のあゆみー創立のころー	清水 ますみ	3
私とアーカイブズ		
すべての南山人のともしびに	岡野 成利	5
自治の芽吹きー女子部生徒会誌“南樹”の創刊	野呂 純二	6
ライネルス館の装飾	高橋 晴之	7
聖霊の校舎と生徒数の変遷	杉浦 泰也	8
ライネルス師の温かく大きな手	西脇 良	10
マッカーサーからの手紙	永井 英治	11
南山発見		
「初代ミカエル」の里帰り	坂野 秀紀	12
史資料解説		
表紙写真のソファとスツール	永井 英治	14



南山大学で使用されていたアントニン・レーモンドのデザインによる家具（南山アーカイブズ所蔵）

巻頭言

過去は前方に、将来は背後に―常設展示室への招き

市瀬 英昭

通常、わたしたちは過去を背後にし、前方に顔を向け、未来へ向かって人生を歩んでいる、というイメージを持っています。そこでは「過去を振り返る、振り返らない」という表現が当たり前のように使われます。一方で、キリスト教も自らの聖典の土台として大切にしている『ヘブライ語聖書』（通称、旧約聖書）を紐解くと、まったく逆の表現に出会います。たとえば、詩編143に「わたしはくいにしえの日々」を思い起こし、あなたのなさったことをひとつひとつ思い返し、御手のわざを思いめぐらします」という神への感謝が記されていますが、文中の「いにしえの日々」は直訳すると「<前にある>日々」となります。確かに、済んだことは、いわば、わたしたちの「前に」ある訳ですから、過去は前方にある、という表現が事実在即しているとは言えそうです。問題は、わたしたちが、目の前にある過去たちを「よく」見ているかどうか、前にある過去の遺産―負の遺産も含めて―から大切なことを学びとり、今に生かしているかどうか、ではないでしょうか。わたしたちの歩みは、「ちょうどボートの漕ぎ手のようなもので、未来の方へ背を向けて、時間の中を漕いで行く人に似ている、つまり彼は、彼の前に見えているものによって方向をとりながら、目標に到達する」（H.W. ヴォルフ『旧約聖書の人間論』184頁）という風に進んでいくのでしょうか。

1549年8月15日、聖母被昇天の祭日に、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸し、日本へのキリスト教伝来の緒となりましたが、それから360年ほど過ぎた1907年9月8日、聖マリアの誕生の祝日に、後に、南山学園を開設することになる神言修道会の3名の宣教師（ヨハン・ヴァイク師、アントン・チェスカ師、ヨゼフ・ゲルハルツ師）が横浜に上陸しています。彼らはそれからすぐに東北は秋田に向かい活動を開始した、と記録されて

います。その後、多くの困難を経て、そして、多くの善意の人々の協力を得て、南山学園を含む神言修道会の日本における活動が展開され現在に至っています。南山学園に限っても、学園の過去とどう向き合うのか、史資料をどのように収集し、展示し、紹介するか、これは地味で困難を伴う作業ですが、非常に大切な仕事です。2016年4月1日付けで南山学園と合併した神奈川県藤沢市の聖園女学院を含む、学園に属する各単位校が「背後に広がる」将来へ向かって共に、支え合いながら、進んでいくために。

関係者の地道な努力と準備の期間を経て、2015年11月20日、南山アーカイブズ常設展示室オープニングセレモニー・内覧会が開催されました。この展示は「全体として、各時期のポイントごとに、バランスよく配列され、一巡すれば南山の歴史の一コマ一コマに接することができるようになっている。また、それぞれに的確な説明も付され、見学者を自然と学園の中に導き入れることにも成功している、と評価できる。」（川崎勝、『アルケイア』10号、180頁）ものとなっています。南山学園に属するわたしたちだけでなく、多くの方々に、南山学園発祥の地ともいえる昭和区杵中開設されたこの常設展示室を実際に訪れていただき、日本におけるミッション・スクールの存在意義、人間教育、研究のあり方について思いを凝らす機会としていただければ幸いです。

（南山アーカイブズ館長／南山大学短期大学部英語科教授）

聖園女学院のあゆみ―創立のころ―

清水 ますみ

凄惨を極めた第2次世界大戦終結直後、多くの兵士を戦場で失い、家庭の大黒柱を失って、疲弊した人々の間には虚脱感が蔓延していました。当時、聖心愛子会（現在の聖心の布教姉妹会）第3代総長であった聖園テレジアは、日本の窮状を目の当たりにし女学校の創設を決意します。日本再建のためには国の担い手となる立派な人物が必要、そのような人間を育てるために、信念のあるしっかりとした女性、無償の愛を生きる良き母親が必要でした。そしてそのような女性を育てる学校、女子校の新設が必要でした。



旧校舎全景

このことを喫緊の課題と考えた聖園テレジアは、直ぐに広大な土地の入手を決意しました。かつてはゴルフ場で、戦時中藤沢海軍航空隊が所有し、戦後、アメリカ進駐軍に接收されていた敷地83,096㎡が、小田急線を挟んで本部修道院の対岸に広がっていました。この土地を手に入れるため、同会会員の聖園イグナチアがその獲得に奔走しました。また全国に点在する同会修道院の三百数十名のシスター達が一丸となり、生活費を切り詰め、バザーを行い、募金活動に協力しました。そして早くも終戦の翌年の春、1946年4月、旧制「聖園女学院高等



正門から見た旧校舎

学校」が創立されました。開校の際、シスター達が一軒一軒訪ね歩いて、生徒を募集したといひます。敗戦直後、心の拠り所を求めていた人々は、これを温かく受け入れました。こうして、最初の年は65名の生徒が入学しました。

手に入れた土地には、進駐してきたアメリカ軍が使用した旧海軍航空隊の兵舎がそのまま残っていて、それを



創立当初のシスターによる授業の様子



旧体育館完成記念の全校ミサ

校舎代わりにして授業が始まりました。

校具も十分には揃ってはおらず、当時、貴重品であった窓ガラスは夜中に盗まれ、風が吹き抜けるのを板を張って防ぎ、雨もりさえする教室だったそうですが、生徒達は素朴で明るく、神様から造られたかけがえのない一人ひとりとして勉学に勤労奉仕に励みました。生徒達の手で廊下がピカピカに磨きあげられ、自分のものとして与えられた鎌で草は丁寧に抜かれ、見事な美しい芝生が広がりました。週末には進駐軍の招待を受けて英語のミサに与って聖歌を歌い、英会話も上達してミッション・スクールの良さを楽しんでいたようです。チャプレンとして学内に住んでおられたベネディクト会のヨゼフ神父様やシスター達から聖書のお話を聴き、イエス・キリストのみ心の愛に動かされて、2年後の中学2年生の時12名が受洗しました。その中の一人は卒業後、本修道会に入会、現在もシスターとして静かにあたたかく子ども達、お年寄りのお世話に励んでいます。

こうして聖園の丘にはイエスのみ心の愛で結ばれた人々の集う「聖園ファミリー」が誕生しました。聖心の布教姉妹会（聖心愛子会）の創立者ライネルス師の「一



旧小学校

人の存在は必ず一つの尊い使命をもっている。一人ひとりを大切に」を教育理念とする聖園女学院のはじまりがここにあります。

南山学園、聖園学院両学校法人の合併を終えた今、創立者ライネルス師の本来創立の精神に思いをいたし、神のみ言葉とイエスのみ心のうちに行われた神のみ業の広がりを目の当たりにし、「時は過ぎ去るものではなく、満ちるものである」との感慨を深くいたします。

（聖園女学院高等学校・中学校長）



現在の聖心聖堂



聖心聖堂内部

私とアーカイブズ

すべての南山人のともしびに

岡野 成利

私は歴史研究同好会の顧問をしている関係で、合宿などでいろいろな地区の郷土資料館や博物館を生徒を連れて見学する。郷土の偉人の業績や地域の輝かしい歴史が展示されていて、ふるさとの歴史や文化に誇りを持てるような素晴らしいものが多い。学校の資料館の役割というのも、まさに地域の博物館と同じようなものだろう。今そこにいる者（在校生）や、ふるさとを後にして様々な場所でがんばっている者（卒業生）が、あらためて学校に誇りをいただくようなものとして存在しているのだと思う。

南山学園発祥の学校である男子部に奉職してはや20年強、その間、先輩の先生方から学校の草創期の歴史を聞いたり古い資料を見ることもしばしばあった。その中でも忘れられないのが、創立初年度の生徒募集要項である。（私が見せてもらったのは複製だった。現在も複製が展示されている。）そこに書かれた理念は、大正自由教育の最末期の余光をそのまま文章にしたようで、いま読んでも全く色褪せていない。

これを目にしたとき、この学校を創立した方々の思いに感服するとともに、それを受け継ぎ発展させる使命の重みに襟を正される思いがしたのを覚えている。この感覚は、若い先生方にもぜひ一度味わっていただきたいと思う。

私はいま広報部長という役職にあるので、こうした理念を広く知っていただき共感者を増やすというとても難しい役割を負っている。そのために

は、まずは創立時の空気を学ばねばならない。その意味で、開学の建物にアーカイブズが存在し、その時代の空気を感じられるものが並べられてあるということはあるがたい。

今も輝きを失っていない創立の理念や、それを承け発展させてきた先人の歩み。その80年以上もの積み重ねが現在の南山学園そのものであり、それをわかりやすく示すものがアーカイブズであろう。児童・生徒・学生がライネルス師の息吹に接し、いま南山にいることの幸せを感じる場であって欲しい。南山に関係する一人一人がここに来て、創立者やそれを発展させてきた「偉人」と語り合える場であって欲しい。そして、私たち教職員も、悩んだとき、迷ったとき、一人ここに来て、南山の創立の精神に立ち帰って決断をする勇気を与える場となって欲しい。

（南山高等学校・中学校男子部教諭）



生徒募集のチラシ

自治の芽吹き —— 女子部生徒会誌“南樹”の創刊

野呂 純二

「“南樹”万歳！私はまずこう叫びたい。南山女子部をふり返ってその記録を書きつづっていく。そして字のごとく樹木のように太く強くのびていくのだ。また、これによって、皆が生徒会を、そしてこの南山を、よりよく知る事になるだろう。これだけでも“南樹”の役割は大きい。……この南山の歴史の中に、私たちは良い業績を残していかなければならない。南山学園のために。私たちのために。それは私たちの使命なのである。」



体育祭応援風景（1969）

時の生徒会長のこうした思いを託して、女子部の生徒会機関誌“南樹”は、1969年に創刊された。「心の自由な人でありなさい」、こう生徒たちに語り続けた創立者ヨゼフ・ライネルス師のリベラルな精神が、ふたたびよみがえりつつあった頃のことである。生徒会の様々な活動報告や部・クラス紹介、特集企画などが載せられ、その基本的なスタイルは今も踏襲されている。

当時の校長フーベルト・フラッテン師は、創刊号に、次のような熱いメッセージを寄せている。

「植樹するものは未来を信じて植える。未来に大きな希望をもっていないものは木を植えることもないだろう。生徒会が“南樹”を植えることは、未来への希望、未来への決意のしるしである。……みんなが“南樹”を囲んで集まり一致して、よりよい学園、よりよい学校生

活、よりよい生徒会活動をめざして努力したい。何年かのちの後輩たちが、南樹誌創刊当時の先輩たちははりきっていたと、今日のわれわれの熱意を感じ、われわれの志をうけつぎ育ててくれるよう力をつくしていこう。」



体育祭応援風景（1970）

時代も移り、生徒たちの心模様も創刊の頃とはずいぶんと変わってきたが、いつの時代にも、良い木は必ず良い実を結ぶ。今年で樹齢48年を数える“南樹”も、さぞかし枝ぶりの美しい名木となって、多くの良い実を私たちにもたらしてくれることであろう。

（女子部の生徒会の正式名称は、1958年の発足当初から、「生徒自治会」ですが、便宜上略称の「生徒会」を用いました。）

（南山高等学校・中学校学監）



『南樹』創刊号・第2号

ライネルス館の装飾

高橋 晴之

枋中の男子部新校舎の工事は順調に進み、周辺の景色もずいぶん変わった。校地南西側の端にあったプールが取り壊されただけでも、通りからの眺めが一変した。またライネルス館と南山講堂を結ぶ東翼は、耐震強度の問題から解体され、ライネルス館は「南山アーカイブズ」のホームページにある写真のように、独立の建物に戻っている。ホームページの写真は1932（昭和7）年の完成当初の姿であり、窓は一部が蔀戸のように突き上げて開ける窓であることがわかる。国際部が発足した頃にはアルミサッシの全面引き違い窓に改装されており、現在見られる姿になっていた。窓の形が違うだけで、印象は大きく異なっている。国際部は1993年3月まで、ライネルス館を使用していた。

昭和初期の建築であるライネルス館は、現在の感覚からすれば、かなり装飾的な要素が見られる。屋上の十字架下と2・3階間の外壁に見られる彫刻（国際部生の一部は「迷える子羊」と呼んでいた）や屋上パラペットの三角形の切り込みなどは特に目を引くものだが、校舎内部にもその時代特有の装飾が見られた。

ライネルス館の中は廊下も教室も床から1m強の高さの腰壁が作られ、曲面の装飾を持つ縁取りがついている。東翼の方もこれと同じ意匠で作られているが、縁取りには曲面の装飾はなく、平面で構成されていた。また教室の窓サッシ下の部分には、輪つなぎの彫刻が施された装飾が現在も見られる。これも東翼の教室部分には設けられておらず、ライネルス館本館部分の特徴であろう。このような装飾が設計者のマックス・ヒンデルの指



「迷える子羊」と呼ばれていた外壁の彫刻

示によって行われたのか、あるいは昭和初期のころの標準的な仕様として作られたものかはわからない。東翼部分が増設された時には、工期や建築費用の削減のため、本館部分の大きな特徴だけを模して作られたと思われる。いずれにしても、このような装飾は、ライネルス館が建設された昭和初期の建築の特徴的な要素であると言ってよいだろう。

国際校の校舎も含め、男子部旧校舎など1960年代以降の建築は、内部はいわば無機的な現代建築であり、細部の装飾は排除されるのが当然であった。このような装飾がその時代の「当然あるべきもの」から、「すでに役割を終えたもの」として消滅していったのが時代のうつりかわりによる流行の変化であるとはいえ、そのライネルス館を使っていた国際部・国際校の閉校発表と重ね合わせて感無量である。

（南山国際高等学校・中学校教諭）



教室窓枠に施された輪つなぎの彫刻

聖霊の校舎と生徒数の変遷

杉浦 泰也

聖霊中学校は南山アーカイブズ常設展示にもあるように、1949年連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）の占領下、第五航空隊が直接管轄する旧日本陸軍野砲三連隊の兵舎を校舎として借用する形で、第一期生50名を受け入れてスタートした。開校間もない1951年には第五航空隊からの校舎明け渡しの通達が出され、学校存続が危ぶまれることとなったが、初代校長シスター・マルチンヒルデらの機敏な行動力により GHQ からの継続使用の許可が下り、事無きを得た。

その後は本格的な学校構想に基づいた校舎建築を目指し、1951年、1956年に校地拡張のため国から土地を買収、1961年には特別教室を中心とした新校舎が完成した。1962年には道路拡張のために北側校地一部を名古屋市に売却した後、1964年には普通教室棟が完成。仮住まいの兵舎ともお別れをし、いよいよ名古屋の中心地で真新しい校舎による学校運営をスタートさせることができた。この年は中学生528名、高校生558名合計1086名と、三の丸校舎時代では最大の生徒数となった。

新校舎完成により、父母から短期大学設置の要望が出始め、当時の理事会も生徒確保のためにも大学または短大の設置について議論されるようになった。しかし三の丸の校地面積は、短大を収められるだけの広さが無く、やがて短大新設と中学高校を含めた全面移転へと発展していった。この時代にはすでに名古屋の中心地であるが故の騒音問題を無視できず、「自然の中で人間性豊かに育てたい」という創立者らの教育的な願いも全面移転を加速させることとなった。

学園関係者は、国、愛知県、移転先となる瀬戸市の要職にある人物との面会を重ね、その中の幾人かが本校生保護者ということにも助けられ、三つの移転候補地が準備された。そして新校舎完成から間もない1967年には

瀬戸市の現校地が移転先として決定した。同年8月には新聞報道によって社会に知られることとなり、結果として中学入学者数が連続して減少していった。

移転初年度の1970年には遂に、中学一年36名と創立以来最少の入学者数となり、中高合わせた全校生徒も586名まで落ち込んだ。高校からの入学生徒募集を再開し、高校の生徒数は順調に伸ばしていくことができたものの、中学入学者は移転後10年以上経過した1981年になっても二桁のままで、中学各学年2クラスもしくは1クラスという危機的状況が続いた。

こうした状況を打開すべく、中学5クラス高校6クラスの学校構想が打ち出され、教職員一丸となって、中学受験者の増加を目指した。小学生保護者に積極的に本校を知らしめる募集活動、地域別説明会、学園バスの創設、中学卒業論文、Eve, My 青春、リーダー合宿、海外研修など、現在でも本校の伝統とも言える教育活動や広報活動がこの時代に相次いで創設されていった。こうした本校教育への評価や第二次ベビーブームによる生徒増にも助けられ、80年代後半には念願の200名の中学新入生を確保することができた。生徒数の増加に伴い校舎の増設も続き、1988年には中高合わせて36クラス1568名の生徒が通う学校となり、さらには高校入学生徒数を漸減させながら、1993年には目標とした中学5高校6クラスの学校体制が遂に完成した。

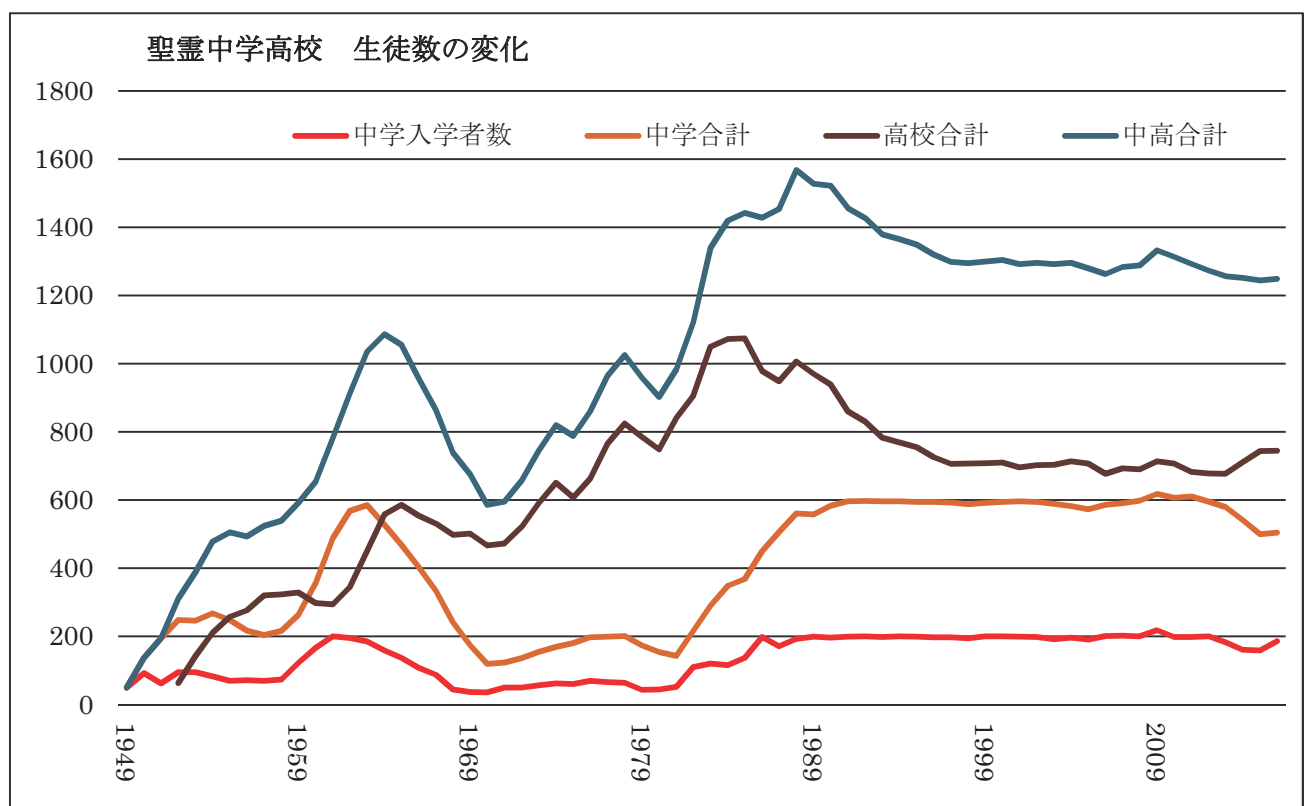
こうした聖霊の校舎の歴史を振り返る時、忘れてはならないのは、三の丸時代に父母の会、後援会の会長を歴任され、三の丸での校地の取得そして瀬戸への移転で中心的役割を果たされた人物、貴島康隆氏である。特に瀬戸市への全面移転という大事業の際には「学園移転建設委員会会長」として、公官庁だけでなく一部民有地の取得交渉においても奔走され、その後は名古屋聖霊学園の

理事として迎えられ、聖霊会のシスターらを支援続けられた。

1970年移転当時、丸裸だった丘の上に建てられた白亜の校舎は、短大校舎との調和から1983年煉瓦色に染められ、今では成長をとげた緑に囲まれ自然の中に溶け込んでいる。「豊かな自然に囲まれた美しい校舎」として、受験生やその保護者が本校志願の理由にあげるほど恵まれたキャンパスとなった。現在の校舎もいよいよ50年を経ようとしており、次なる校舎の検討のために

SFEC 委員会が立ち上げられた。この委員会から提出された報告書にはこう記されている。「三の丸とはうって変わって広大な丘陵地帯にある校舎、四季折々の風情を見せる美しい自然環境に囲まれた中で、聖霊中学高等学校は新たな門出をむかえた。この環境が生徒に与える影響は計り知れないものがある。移転を決断した当時のシスターや関係者の先達は、結果的に先見の明があったといえる。」

(聖霊高等学校・中学校副校長)



ライネルス師の温かく大きな手

西脇 良

学園創立者ヨゼフ・ライネルス師の数ある写真の中でも、大切にしたい1枚がある。この写真である(写真1)。

裏書に「1926年11月21日 岐阜のカトリック教会にて」とある。子どもの肩に優しく手をのせ、こちらを見つめるライネルス師。カメラの前の子どもと師の間に交わされた会話はどのようなものであったか。

2008年3月22日の南山大学附属小学校開校式当日、お招きした旧・南山小学校の在校生の方々に、当



写真1

時の思い出を語っていただいたことがあった。「サンタクロースのような白いひげを生やして、温かな大きな手で頭を撫でてくださった。」「やはりライネルス先生は一番の思い出の先生だった。」などのエピソードが寄せられた。

在校生の心に今なお残るこれらの思い出と、先の写真とを重ねるとき、ライネルス師が、多忙な日々の中、どのように児童と接していたのかを、とくに師がかれらに見せた表情、振る舞いや仕草について、思いを巡らせずにはいられない。あれから80年以上を経た今、南山の名のもとに集い来て学び合う児童、生徒学生と、今度は私たちが、人格的出会いを繋いでいくのである。

ライネルス師との人格的出会いを経験した旧・南山小学校の子どもたち。昨年、南山大学附属小学校は、その「元・子ども」であった或る兄弟との不思議な出来事を体験した。若原兄弟である。

兄・若原六治郎氏は絵画を趣味とし、2014年に逝去

された。遺品を整理しているうちに、或る紙芝居が未完成のまま残されているのが見つかった。宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』であった(写真2)。兄の思いを汲んだ弟・六三郎氏は、復活なった南山大学附属小学校にこれを寄贈、小学校では、保護者会わかみどりの全面協力をえて、全児童が参加する形でこの紙芝居を完成させることにしたのである。

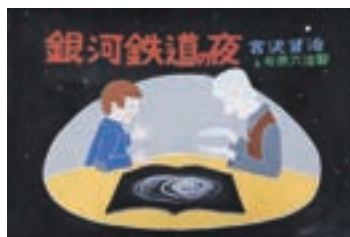


写真2

小学校の図工科教員2名(壱岐・宮川)が下絵を担当し、各学年で1枚、全児童が少しずつ手を加えてゆくと、ほどなく

全26枚からなる『銀河鉄道の夜』の完成をみた。その見事な作品は保護者会わかみどり主催「南山つ子フェスティバル」(2016年2月27日)において、全児童・保護者の前で披露され、大喝采を浴びた。この、奇跡的出会いの物語は東海テレビでも取り上げられ(2016年3月30日放送)、大きな反響を呼んだ。

旧・南山小学校で学んだ先輩が遺した絵を、復活した南山大学附属小学校に通う後輩が力を合わせて完成させたのである。それも、宗教的示唆に富む、あの『銀河鉄道の夜』を。

学園創立者・ライネルス師の温かい大きな手で育まれた、旧・南山小学校の子どもたち。南山小学校の「復活」である南山大学附属小学校の子どもたちもまた、銀河鉄道に乗り込んで、ライネルス師の温かく大きな手に触れたのだ。子らよ、君たちもまた、世のカムパネルラとなり、人生の中で<ほんとうにいいこと>を見つけ、実行する人とならんことを。

(南山大学附属小学校長／南山大学総合政策学部教授)

マッカーサーからの手紙

永井 英治

名古屋聖霊学園は聖霊中学校の創設時に校地・校舎を所有しておらず、占領軍が接收している土地と建物を借用していた。接收が解除されたときには日本政府からそれらの売却を得ることになっていたが、朝鮮戦争の勃発がその実現を危うくした。接收解除どころか貸与の中止が伝えられたのである。

写真の資料は、1951年5月3日付けで、貸与中止の取り消しと接收解除を、アメリカ空軍大佐の名で認める書類（写し）である。しかし、この書類には重要な前提があった。

占領軍が貸与中止を取り消したのは、校長マルチンヒルデ・シュリーテルと理事長エマヌエレ長谷川が連合国軍最高司令官であるマッカーサーへの直訴嘆願を実行しようとして GHQ/SCAP を訪問し、マッカーサーには会えなかったものの副官に手紙を託したことによる。後日、連合国軍最高司令官総司令部 GHQ/SCAP から書類が届き、聖霊中学校が校地・校舎を失う危機は回避できた。この書類は『南山学園史料集2名古屋聖霊学園史料集第一編』に掲載されているが、それもオリジナルの文書ではなく、国立国会図書館憲政資料室がアメリカ国立公文書館 NARA で複写収集した GHQ/SCAP 文書からの翻刻掲載である。

現在、この GHQ/SCAP からの書類は所在が確認できない。2006年8月28日付けで発行された『南山学園史料集2名古屋聖霊学園史料集第一編』の編纂の過程でも確認できず、2016年3月～4月にかけて、聖霊高等学校・中学校および聖霊俸持布教修道女会に再度の調査を依頼したが、見つめることはできなかった。遡れば、1981年11月1日付けで発行された『名古屋聖霊学園三十年史』には、貸与中止すなわち明け渡し命令の取り消しに至る過程が詳細に記述されているが、GHQ/SCAP から

の書類については、日本語訳した趣旨が書かれているのみであり、引用という形をとっていない。GHQ/SCAP からの書類が届くに至る経緯そのものは関係者にはよく知られており、記録もあって、それも『南山学園史料集2名古屋聖霊学園史料集第一編』に収録されている。以上から、『名古屋聖霊学園三十年史』編纂の段階で、問題の書類は所在不明になっており、そのために文面の正確な引用ができなかったのではないかと推定される。

写真の資料は、問題の書類で認めた内容をより具体的に指示しており、手続きの上でのリアリティはこちらの方が高いという評価も可能である。しかし、それはすべて GHQ/SCAP から



の書類が基礎となってい 接收解除証明書（1951年5月3日）
る。聖霊中学校存続の危機を回避させた貴重な書類であることは間違いない。

推測にとどまらざるを得ないが、問題の書類は、その後の払い下げ手続きの中で提出を求められたとも考えられる。その場合でも、なぜ写真の書類のように控えをつくらなかったかという疑問は消せない。英文のタイプ原稿で全文を写し取っておくことは、聖霊中学校／聖霊会の人々には容易な作業ではなかったと思われるからである。

極めて重大な場面に、劇的に書類がもたらされ、誰もがその効果を知っている。その中で、当の書類そのものへの関心が希薄になり、現状に至ったのであるなら、学ぶべきことはひとつである。

（南山アーカイブズ／南山大学人文学部人類文化学科教授）

南山発見

「初代ミカエル」の里帰り

坂野 秀紀

去年秋、南山アーカイブズに展示されたグライダー「初代ミカエル号」を見た。木製の胴体に座席があり、操縦桿とペダルが動く。下は車輪でなくソリ。一見きしゃな感じで、こんなものが空を飛ぶのかと気になるが、強度はあり、軽量化の極致の姿だ。50年前には主翼と尾翼をつけて、南山大学航空部の愛機として、立派に空を飛んだ。役目を終え徐々に散逸し、思い出つまった操縦席だけは最後まで残り、やっと南山学園の“公文書館”に安住の地を得た。



飛行中の初代ミカエル号（1960年1月28日）

手元に1冊の航空機乗組員手帖がある。顔写真付きの最初のページをめくると、飛行記録の1行目に「1959年3月19日、K-14、JA0160、各務原、地上滑走、高度0」とある。自分が最初にグライダーに乗った記録で、初代ミカエルの初飛行の日でもあった。場所は各務原市の航空自衛隊岐阜基地内の芝生広場。まだ大学入学式の前だが高校の先輩から「新しい機体が入るから来いよ」と誘われての参加だった。

初代ミカエル号は、型式を霧ヶ峰式はと K-14型初級滑空機（プライマリー・グライダー）といい、全幅10m、全長6.4m、全高2.2m、重量80kg。航空局にJA0160と登録された正式な航空機だ。性能を表す滑空比は11で、時速50kmのときに高度の11倍の距離を飛べた。

失速速度は41kmだった。翼は木の骨組みに布を張り、ニスに似た塗料で空気を通さないようにした。全体をワイヤーで張って形を保った。操縦桿とペダルを動かすと、機体の姿勢を上下、傾き（バンク）、左右方向にコントロールできた。肩と腰をベルトで締め、左手で座席を握って姿勢を保った。座席には左から乗って座るのが決まりで、飛行機はすべて左に入口があるのにならった。

発航方法は人力で、太さ4cmほどのゴム索にロープをY字形につけ、それぞれに5、6人ずつ綱引きのように持ち、風に向かって引く。翼端係が翼を水平に保ち、テール係が尾部ロープを地上の杭に固定。教官と呼ばれる指導者が「よーい、引け」と叫ぶと、力いっぱい引いてゴムを伸ばす。「放せ！」の合図でテール係が放すと、グライダーは勢いよく飛び出す。ゴム索は機首のフックから外れ、引いた歩数で高度が決まる。最初は地上を滑るだけで、次は高度1m、3m、5mなどのジャンプに移り、上達すれば高度15mほどで約200m先まで飛べた。直線滑空、右旋回、左旋回、蛇行などの課目があり、操縦操作で機体はどう動くか体感するのが目的だった。

燃料がいらないため、昭和初期から太平洋戦争まで全国の中学校以上の体育授業として配備されたほど普及した。しかし、軍の操縦士養成に利用された宿命を持ち、敗戦で日本の航空活動は中断した。独立した1952年、かつての経験者が復活に動き、グライダーはスポーツ航空として空を楽しむようになった。

再発足した日本学生航空連盟の呼びかけで南山大学でも1955年に航空部をつくり、東海地区の各大学と一緒に活動を開始した。最初は連盟の機材を使い、各大学が自前で所有する気運が高まり、南山も4年後に機体所有校となった。それが初代ミカエルで、命名式は1959年

4月17日、ライネルス館を見上げるグラウンドに部員約20人が集まって機体を組み、司祭から祝福を受け、大空を駆けて悪魔を退治する大天使ミカエルの名を愛称とした。

初級を約1年、50回ほど乗ると、中級滑空機（セカンドリー）、上級滑空機（ソアラ）に進み、ウィンチ、自動車、飛行機で引っ張って高度300mから600mほどに上げる練習となった。2人乗りの複座機だから安全で効率もよく、プライマリーは徐々に飛行回数を減らした。初代ミカエルは約6年間飛行し、あとは部室や格納庫でほこりをかぶる運命となった。航空部は1995年5月、ドイツ製のアレキサンダー・シュライハー式 ASK-23B 型機（ソアラ）を新たに購入し、短命だった初代の愛称を受け継ぎ二代目「ミカエル」とした。春のフレッシュマン祭で新入部員を勧誘しているおなじみのスマートな機体。滑空比は時速90kmのとき34で、失速速度は74kmと高速化している。

グライダーには「耐空検査」があり、年1回受けて安全性を確かめる。操縦者については、部員になるとまず航空身体検査を受けて「操縦士練習許可証」を取り、上達すると学科、実技の試験に合格して自家用操縦士の技能証明を取り、身体検査を添えて「航空免状」というライセンスがもらえる。厳格な安全管理のため、卒業までにそこまで行けるのはいい方で、歴代航空部員約200人中、1割ほどに留まる。

鳥のように空を飛びたい——人類の夢が実現したのは、フランス革命直前のパリ。モンゴルフィエ兄弟が1783年熱気球に2人を乗せ、25分飛ばせたのが初の有人飛行で、ガス気球、飛行船を含め、空気より軽い乗り物「軽航空機」の時代が110年続いた。空気より重い「重航空機」は、1893年にドイツでリリエントールが丘からグライダーで飛び降りる実験を繰り返して滑空に成功。1903年のアメリカでライト兄弟がエンジン付き飛行機に成功したのは有名だ。翼の上面を盛り上げることで空気の流れに上下の差をつけ、揚力をつくるベルヌーイの定理を応用したのが普及のカギだった。小さな町工場で作った試作が相次ぎ、学術機関では風洞実験で翼断面の研究が進み、人々の旅行熱も加わって、現代の巨大で複雑な航空産業へと発展した。もう飛行機がなぜ飛ぶのか、多くの旅行客が気にしない世の中になった。



各務原にて（1959年3月19日）

グライダーは離陸に他の力が必要なため普及は限られたが、飛行の原理と気象を理解し、安全を確認しながら飛べば、快適な空の散歩を楽しむことができる。初代ミカエルは簡単な構造ゆえ、翼の大きさと全体の重さの関係（翼面荷重）が間近に見え、飛ぶ原点がわかる素晴らしい教科書といえる。

南山アーカイブズのあるライネルス館は、在学中の4年間勉強した教室でもあり、木の廊下や窓の鉄枠など当時の記憶そのままだ。1932年の建築というから84年も健在の、学園のモニュメント。初代ミカエルが初代校舎に里帰り——こんな嬉しい話はなかなかない。

（南山中学校、高等学校、南山大学卒業生、
南山大学航空部監督、南山大学航空部 OB 会長）



初代ミカエル初飛行日、各務原にて（1959年3月19日）

史資料解説

表紙写真のソファとスツール

永井 英治

表紙写真のソファとスツールは、南山大学名古屋キャンパスの新設時に、キャンパス全体の設計を担ったアントニン・レーモンドのデザインにより作成された家具の一部である。2015年度末まで現役で使用されており、2016年度、南山大学施設課より南山アーカイブズに移管された。施設課によって必要な補修が施されており、今でも利用可能な史資料である。

レーモンド・スタイルと呼ばれる建築が完成するためには、構造計算でレーモンドに協力してくれる人物が必要であったとされるように、レーモンドの本領は、意匠にあった。少なからぬ建築家が画家でもあったように、レーモンドも絵を描いた。また、濱田庄司の手ほどきを受けて陶芸も試みていた。そのようなレーモンドであったから、家具のデザインを自分自身で行なうことは自然な発想であったと考えられる。ただし、気負うことなく使うことができるという指摘が、レーモンドのデザインによる家具を使用している人々から聞かれるように、意匠が強烈な自己主張をするのではなく、家具本来の機能の有用性が注目されるという逆説がレーモンドのデザインにはついてまわる。

映画『ロッキー』で有名になったフィラデルフィア美術館には、ジョージ・ナカシマのデザインした椅子が展示されている。ジョージ・ナカシマはフランクロイド・ライトとともに来日したのち、レーモンド設計事務所に在籍したことがある建築家であり、のちに家具デザイン

をおもに行なうようになった。太平洋戦争時に移民収容所に入れられたナカシマを、レーモンドが身元引受人となって収容者から出させており、建築家としては厳しく臨む一面を持ったレーモンドが情に厚い人間であったことが知られる。「匠」を指向し、バウハウスを嫌ったナカシマのデザインは、「量」が求められる南山大学新キャンパスにストレートに採用されることは難しかったであろうが、レーモンドとナカシマが双方に及ぼした影響は今後も検討すべきと思われる。

レーモンドの家具デザインにもっとも大きな影響を与えたのは、妻のノエミであったと言ってよいであろう。ノエミの専門領域がまさにインテリアデザインであり、レーモンドの名によるデザインの多くがノエミに拠ったものであったことは、伊藤真司が的確に指摘している。そして、建築そのものについてもノエミの影響が大きかったことは、南山大学の設計そのものに示されている。丘陵を掘削して起伏を減らすという選択を行なわなかったのは、ノエミの自然観が影響している。夫婦であるためか、二人の関係はプライベートなものとして捉えられてしまうのかもしれないが、専門領域での相互交渉は、個人の視点に立脚して理解されるべきであろう。限られた条件の下で作成された南山大学の家具に、二人の意図を如何に読み取るか、南山アーカイブズに移管された家具はそのための貴重な素材である。

展示室のご案内

南山学園の歩みを概観していただける常設展示室と南山学園の歴史について様々な視点からの展示を行う企画展示室があります。

～～現在開催中の企画展～～

テーマ：アントニン・レーモンドと南山学園
開催期間：2016年10月3日～2017年7月28日
開館時間：月～金（土・日・祝・事務休業日を除く）、
10：00～16：00

入場無料、予約不要でどなたでもご見学いただけます。皆様のご来館をお待ちしております。

南山アーカイブズニュース 第9号

Nanzan Archives News

発行日 2016年11月1日
編集・発行 南山アーカイブズ
〒466-0838 名古屋市昭和区五軒家町6番地
印刷 常川印刷株式会社
〒460-0012 名古屋市中区千代田二丁目18-17